

聖書日課『からし種』 2026.2.8-2.15

2月8日 (日) レビ記 11章	「あなたたちは自分自身を聖別して、聖なる者となれ」(44 節)。「汚れ」に関する規定の数々は、新約で「神が清めた物を清くないなどと言ってはならぬ」(使徒 10:15)という御言葉で乗り越えられた。ただ、神がなぜ「聖なる者たれ」と求めたのか。それは出エジプトの解放の恵みだけ(45 節)を握りしめて生きる者となるため。その主の御心を大切に受けていきたい。
9日 (月) レビ記 12章	「なお産婦が貧しくて小羊に手が届かない場合には、二羽の山鳩または二羽の家鳩を携えて行き…献げ物とする」(8 節)。多くの人が小羊を献げる中、マリアとヨセフは鳩しか用意できなかった。しかし神への献げ物は周りとの比較ではない。神が喜ばれるのは神の召命に応える真摯な祈り。貧しい夫婦の真摯さに心動かされたシメオンの賛美が聞こえてくる。
10日 (火) レビ記 13章	「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き…『わたしは汚れた者です…』と呼ばわらねばならない」(45節)。律法の世界では「あなたは汚れている」と宣告された瞬間、その人の人生は奈落の闇に落ちる。「御心ならば、わたしを清くすることができます」(マルコ 1:40)と、ひれ伏し願う人の重たい叫びを主イエスは心の真ん中に受けられた。ここに救いがある。
11日 (水) レビ記 14章	「その後、この生きている鳥は野に放つ」(7節)。重い皮膚病の者が祭司から癒しの宣告を受ける時、清い鳥二羽のうち一羽が殺され、もう一羽は死んだ鳥の血に浸された後、野に放たれる。重い皮膚病のゆえに共同体から排除され隔離されてきた者が自由になるために犠牲となる鳥の命。私たちもまた十字架の主によって自由を与えられていることを覚えたい。

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

12日 (木) レビ記 15章	「もし、生理期間中でないときに…出血がやまないならば…触れた人はすべて汚れる」(25節、27節)。長血の女性(マルコ 5 章)がどれだけ深い悲しみと絶望の中に閉じ込められていたことか。主イエスに正面から会えない、人々に紛れて後ろからそっと触るだけ。しかし、服の裾に触れた手に叫びを感じられた主は、彼女と正面から向き合い、癒しを告げられた。
13日 (金) レビ記 16章	「アロンは…雄山羊の頭に両手を置いて、イスラエルの人々のすべての罪責を背きと罪とを告白し…荒れ野の奥へ追いやる」(21～22節)。人々の罪を背負わされ荒れ野に追いやられる「スケープゴート」。本来はその犠牲により神と人との正しい関係が回復するためのもの。けれども私たちの社会では罪人が平然と生き延びるための犠牲にされてしまっている。
14日 (土) レビ記 17章	「わたしが血をあなたがたに与えたのは、祭壇の上であなたたちの命の贖いの儀式をするためである。血はその中の命によって贖いをするのである」(11節)。旧約の人々にとって血は命そのものをあらわした。犠牲の動物の血が流される様は実に生々しい。が、人はその血を見ながら、自分が生かされるために払われる犠牲の尊さを深く心に刻んだのだった。
15日 (日) レビ記 18章	「わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。わたしは主である」(5節)。主の掟は、人の心の弱さを見透かしたように細やかに例示して、それらから遠ざかりなさいという希望を示す。しかし、この掟を人は律法とし、他者を縛り、罰するための法としてしまった。罪を犯すな！という主の配慮をわたしたちは受け取りたい。